

顯淨土真實教行証文類 「総序」 親鸞聖人

竊以難思弘誓 度難度海大船 無碍光明破無明闇惠日
竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、
無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。

然則 淨邦縁熟 調達闇世興逆害

しかればすなわち、淨邦縁熟して、
調達、闇世をして逆害を興せしむ。

淨業機彰 釈迦韋提選安養

淨業機彰れて、
釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまえり。

斯乃権化仁 斉救済苦惱群萌 世雄悲正欲惠逆謗闡提

これすなわち権化の仁、
斉しく苦惱の群萌を救済し、
世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲す。

故知 円融至徳嘉号 転悪成徳正智

かるがゆえに知りぬ。
円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、

(訳) わたしなりに考えてみると、思いはか
ることのできない阿弥陀仏の本願は、渡る
ことのできない迷いの海を渡してください
大きな船であり、何ものにもさまたげられ
ないその光明は、煩惱の闇を破ってください
る智慧の輝きである。

ここに浄土の教えを説き明かす機縁が熟
し、提婆達多が阿闍世をそそのかして頻婆
娑羅王を害させたのである。

そして浄土往生の行を修める正機が明ら
かになり、釈尊が韋提希をお導きになつて
阿弥陀仏の浄土を願わせたのである。

これは菩薩方が仮の姿をとつて苦しみ悩
むすべての人々を救おうとされたのであ
り、また如来が慈悲の心から五逆の罪を犯
すものや仏の教えを謗るもの、一闡提のも
のを救おうとお思いになつたのである。

よつてあらゆる功德をそなえた名号は、
悪を転じて徳に変える正しい智慧のはたら

難信金剛信樂 除疑獲証真理也

難信金剛の信樂は、

疑いを除き証を獲しむる真理なりと。

爾者凡小易修真教 愚鈍易往捷徑

しかれば、凡小修し易き真教、

愚鈍往き易き捷徑なり。

大聖一代教 無如是之徳海

大聖一代の教、この徳海にしくなし。

捨穢欣浄 迷行惑信 心昏識寡 悪重障多

穢を捨て浄を欣い、行に迷い信に惑い、

心昏く識寡なく、悪重く障多きもの

特仰如来発遣 必歸最勝直道 専奉斯行 唯崇斯信

特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、

専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ。

噫弘誓強縁 多生回値 眞実浄信 億劫回獲

ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく、眞実の浄信、

億劫にも獲がたし。

遇獲行信 遠慶宿縁

たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。

きであり、得がたい金剛の信心は、疑いを除いてさとりを得させてくださるまことの道であると知ることができる。

このようなわけで浄土の教えは、凡夫にも修めやすいまことの教えなのであり、愚かなものにも往きやすい近道なのである。

釈尊が説かれたすべての教えの中で、この浄土の教えに及ぶものはない。

煩惱に汚れた世界を捨てて清らかなさとの世界を願いながら、行に迷い信に惑い、心が暗く知るところが少なく、罪が重くさわりが多いものは、

とりわけ釈尊のお勧めを仰ぎ、必ずこの最も勝れたまことの道に帰して、ひとえにこの行につかえ、ただこの信を尊ぶがよい。

ああ、この大いなる本願は幾たび生を重ねてもあえるものではなく、まことの信心はどれだけ時を経ても得ることはできない。

思いがけずこの眞実の行と眞実の信を得たなら、遠く過去からの因縁をよろこべ。

若也此回覆蔽疑網 更復逕歴曠劫

もしまたこのたび疑網に覆蔽せられれば、
かえつてまた曠劫を径歴せん。

誠哉 摂取不捨真言 超世希有正法

誠なるかなや、摂取不捨の真言、超世希有の正法
聞思莫遅慮

聞思して遅慮することなかれ。

爰愚禿積鸞 慶哉 西蕃月支聖典 東夏日域師釈

ここに愚禿積の親鸞、慶ばしいかな、

西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、

難遇今得遇 難聞已得聞

遇いがたくして今遇うことを得たり。

聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。

敬信真宗教行証 特知如来恩徳深

真宗の教行証を敬信して、

特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。

斯以慶所聞 嘆所獲矣

ここをもつて、聞くところを慶び、

獲るところを嘆ずるなりと。

もしまたこのたび疑いの網におおわれたなら、もとのように果てしなく長い間迷い続けなければならぬであろう。

如来の本願の何とまことなることか。撰め取つてお捨てにならないという真実の仰せである。世に超えてたぐいまれな正しい法である。

この本願のいわれを聞いて疑いたためらつてはならない。

ここに愚禿積の親鸞は、よろこばしいことにインド・西域の聖典、中国・日本の祖師方の解釈に遇いがたいのに今遇うことができ、聞きがたいのにすでに聞くことができた。

そしてこの真実の教・行・証の法を心から信じ、如来の恩徳の深いことを明らかに知つた。

そこで聞かせていただいたところをよろこび、得させていだいたところをたたえるのである。

「総序」について補足

親鸞聖人は、著作の中でご自身の心境などを書き記している部分は少なく、「総序」はその中の一つ。率直な思いが語られ、「ああ、弘誓の強縁くく遅慮することなかれ」の辺りは法話などでもよく紹介される。

ご和讃について

和讃とは、仏法や仏徳を讃える七五調の歌。親鸞聖人は七六歳頃から製作を始められ、五百首以上の和讃を残した。「浄土和讃」「高僧和讃」「正像末和讃」は「三帖和讃」と称され、聖人の宗教的感情が豊かに表現されている。第八世蓮如上人によって「正信念仏偈」とともに開版。門徒の勤行に用いられるようになる。

・浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし

・無慚無愧のこの身にて まことのこころはなけれども
弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまふ

・如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし

教行信証「顕浄土真実教行証文類」の簡単な解説

親鸞聖人（一一七三年～一二六三年）五二歳頃の著書。晩年まで加筆修正され、教、行、信、証、真仏土、化身土の六卷からなる。

広く經典や解釈論の中から念仏往生の要文を抜粋・編集し、浄土真宗の教義を組織体系化した。すべてを阿弥陀仏の回向の働きと捉え、信心に中心を置いて説く。大乘仏教思想でも革新的な書。

初めの総序にて阿弥陀仏の絶対他力を論じ、信巻にも序を設けて信の重要性を示し、結びに後序を記して法然門下の罪科に処せられたことや、師法然より受けた恩恵などに触れている。

聖人はこの書において、浄土に往生する往相も、浄土よりこの世に帰って人に救いを与える還相も、ともに仏の本願力の回向によると断じた。

教えも念仏も信心も悟りも、すべて仏の回向によることを經典や論・釈の膨大な引用より論証。当時の仏教界の中で、称名念仏の正当性真实性を明らかにされ、浄土真宗における立教開宗の書とされる。